

寄稿

宇都宮市出身の「島守」荒井退造の顕彰 —その活動と展望—

作新学院大学女子短期大学部 教授 西田 直樹

1 はじめに

(1) 見直される荒井退造

荒井退造（明治33年～昭和20年）は、栃木県芳賀郡清原村（現宇都宮市清原地区）出身の内務省の官僚で、太平洋戦争—沖縄戦時に沖縄県警察部長として、官僚の立場から沖縄県民の疎開・避難、食糧確保などに命をかけて尽した人物である。沖縄県では、中央政府（内務省）の官僚でありながら、任地である沖縄に最後まで踏みとどまり、県民のために力を尽くした人として多くの県民に感謝されている。ところが、この荒井退造について、私たちは、戦後70年を迎えるまで、ほとんど知る機会を得ず来た。もちろん、彼の出身地にあたる栃木県宇都宮市においても小学校や中学校で習う社会科（歴史や郷土学習）の教科書や副読本で紹介される事はなかった。

平成27年10月から、私は作新学院大学で担当する「とちぎ学」という地域学習の授業の中で、荒井退造を取り上げている。それは、宇都宮において市民による荒井退造の顕彰活動が大きな進展を始めた時期にあたる。つまり、平成25年の塚田保美氏の栃木県立宇都宮高等学校の同窓会報への寄稿、平成27年のNPO法人菜の花街道（代表荒井俊典氏）設立をきっかけに、地元の「下野新聞」¹や「真岡新聞」²においても荒井退造を紹介する

記事が連載された時期ということである。

なお、学校教育の場で荒井退造が最初に取り上げられたのは、平成27年2月に宇都宮市立清原南小学校（退造の母校・旧鑑山尋常小学校）で行われた室井光氏による道徳の授業での講話「本校が生んだ偉人荒井退造」である。戦後70年をきっかけに、地域における荒井退造への関心は少しずつではあるが、広がりつつあった。

(2) 知られて来なかった荒井退造

荒井退造の顕彰活動において、「そのような人がいたとは、知らなかった。」という言葉をよく聞き、目にする。それは、荒井退造と宇都宮市（地元地域）とのつながりが、少・青年の時期に限られていることが第一の要因である。

荒井退造の評価は沖縄県警察部長の時期の業績によるものである。また昭和2年内務省に入省以来、栃木県内に赴任した事もない。誠に残念なことに、沖縄県において「島守（しまもり）」「恩人」とまで言われる荒井退造であるが、栃木県及び宇都宮市との繋がり希薄と言わざるを得ない。これは、その後の顕彰活動の中でも一つのハードルとなって来たと考えられる。

(3) 荒井退造から何を学ぶべきか

荒井退造は、その生き方や仕事への責任感に共感する人々を結ぶ不思議な力を持っていると思われる。次第に広がって行く退造顕彰の輪には、地域の課題の解決、まちづくりの原動力となる可能性がある。また栃木県や宇都宮の市民と沖縄の市民をつなぐ温かな絆となることも期待されている。

¹ 平成27年1月22日、2月20日、23日、6月10日、14日、21日、6月23日、24日、27日、7月4日、5日、6日、8日、9日、10日、12月6日。（(2)/(3)は「島守 荒井退造 沖縄の人々を救った県人」の連載記事。）

² 当該記事掲載年月日は、平成27年2月6日、4月17日、24日、5月8日。

2 荒井退造の生涯とその評価

(1) 荒井退造の生涯

荒井退造は、明治33年に栃木県芳賀郡清原村大字上籠谷字高田で、荒井家の次男として生まれた。鑑山尋常小学校、清原尋常高等小学校、栃木県立宇都宮中学校で学び、その後上京。高千穂高等商業学校に進学した後、警視庁の巡査をしながら明治大学専門部（夜間）で学んだ。

昭和2年に高等文官行政科試験に合格。

昭和6年の卒業と同時に内務省に採用され、昭和7年に従七位³に叙せられ警視庁警視となった。その後麻布六本木警察署長、ハルピン（哈爾濱）警察公署長、新京（現長春）の警察部長、奉天（現瀋陽）警察庁理事官を歴任している。

その後、内地に戻り、昭和14年に福島県（農務課長）、昭和15年に山口県（学務課長）、昭和16年に長野県（地方警視・警察部特別高等警察課長）、昭和17年に福岡県（地方警視・警察部特別高等警察課長・同経済保安課長・外事課長）、昭和18年に福井県（官房長・知事官房人事課長事務取扱）を歴任している。

昭和18年7月に退造は、沖縄県警察部長となった。戦局が悪化して来た昭和19年には、老幼婦女子の県外疎開に尽力する。（その中で同年8月に対馬丸の撃沈事件が発生し疎開を主導・推進していた退造は苦境に立たされることになる。）同年10月10日、沖縄は、米軍艦載機による大空襲を受けた。（十・十空襲）この大規模な空襲は、沖縄が米軍の攻撃目標に定められたことを意味しており、知事を筆頭に沖縄県庁職員の危機感が大きく膨れ上がって行くことになる。

十・十空襲以降、知事や県幹部が公務や健康を理由に沖縄県を離れがちになり、退造は県政の多くの部分で判断を迫られる状況になって行った。

一方で県内世論は一転、退造が進めた疎開策が理解されるようになる。

昭和20年1月、島田叡（しまだ あきら）が新たな沖縄県知事として赴任した。退造への理解を示した新知事のもと、県民の避難や食料確保が進められるが、4月1日、ついにアメリカ軍が沖縄本島に上陸を開始する。砲弾や爆弾がさく裂する戦闘状態の中で、行政官にできる事は限られており、島田知事と退造は、住民避難と食料確保、壕（ガマ）内の衛生管理の指導などに全力を尽くしていくことになる。沖縄戦末期、島田知事と退造は共に行方不明となり、この時期に死亡したとされている。荒井家では、6月26日を退造の命日と定めている。

(2) 荒井退造の評価すべきポイント

1) 沖縄戦時の警察部長としての功績への評価

前述のごとく、中国（外地）を含めて各地を転任した荒井退造であるが、その功績は、沖縄戦時の県警察部長としての働き方にある。元沖縄県知事の太田昌秀氏は、「沖縄の恩人、荒井退造警察部長について」⁴の中で次のように述べている。

沖縄戦が始まる前年の県政は、臆病な知事や内政部長ら県首脳が十・十那覇大空襲後、本島中部の普天間に避難したことで文字通り機能しなくなっていた。そのような状況下で荒井退造警察部長が唯一人、知事の中部への県庁移設に反対して県庁舎で全警察官を指揮して戦場県政に苦闘した。翌年の一月末に大阪の内政部長から沖縄県知事に決死の覚悟で赴任した島田叡知事は県民保護に徹して行政にあたり、沖縄守備軍首脳が公布計画していた戒厳令の施行を食い止めた。この時、荒井警察部長は知事の唯一の相談相手として死生を共にするようになる。（p. 11～15）

3 最終の官位は、正五位。

4 『たじろがず沖縄に殉じた荒井退造』の「序に代えて」という文章のサブタイトル（内題）として用いられたもの。

このような行政官としての評価に加えて、職務等によって、退造に接した人が語る彼の实直な人柄が、後の「恩人」という評価につながっている。

2) 働きながら学び続けた姿勢への評価

今一つ、現代の視点から荒井退造の生涯を見た時に、上京して警視庁の巡查として働きながら、夜間の大学で学び続け、高等文官行政科試験に合格したということも、評価されている⁵。

退造の生涯を記す（あるいは語る）時に、巡查として働きながら学び続け、高等文官行政科試験に合格したことが除かれることはまず無い。

自らの目標の達成のために働きながら学び続けたという退造の姿勢は、高等教育機関の授業においては重要である。受講する学生が自らの仕事人生（キャリアプラン等）を考え始める時期に、退造の青年期の生き方が良いきっかけを与えてくれるものと私は捉えており、自らの教育活動においてもそれを学生に伝え続けている。

もちろん、この時代に退造だけが勤労学生として苦勞を重ねていたわけでは無いが、高等教育のレベルにおいて多様な学び方があり、社会人として職業を持ちながら学び続けることもあるというモデルになり得る、今後更に生かして行くべき点であると評価すべき事項である。

(3) 荒井退造の顕彰活動について

荒井退造の顕彰活動については、栃木県立博物館の大越惟弘氏が平成31年3月刊行の「栃木県立博物館研究紀要 36号」の「新収蔵の荒井退造関係資料について」の中で次のようにまとめている。

荒井退造の事績に関しては、長男の紀男氏が約二〇年にわたり綿密な取材を行い、その集大成として『戦さ世の県庁』を平成四年

(一九九二)に自費出版して、沖縄戦当時の県行政や県民疎開の実態を明らかにした。その後、島田叡沖繩知事と荒井退造の二人に焦点を当てた田村洋三『沖繩の島守 内務官僚かく戦えり』が平成十八年(二〇〇六)に刊行され、退造の事績が島田知事と並び称されることとなった。また、平成二七年の下野新聞社の特集「とちぎ戦後七〇年」や、菜の花街道 荒井退造顕彰事業実行委員会『たじろがず沖繩に殉じた荒井退造』、平成三〇年(二〇一八)の塚田保美『沖繩疎開の父荒井退造 極限の中で任務を全うした沖繩の警察官』刊行によって、栃木県民に広く退造とその事績が紹介された。(p.25)

この大越氏による荒井退造の顕彰活動の「あゆみ」に関する記述は、公的機関における研究成果としては初めてのものである。今後、多くの人々が様々な立場から荒井退造の顕彰活動に携わっていく中で、その顕彰活動の「原点」と「あゆみ」を記した貴重なものである。また顕彰活動の中で長く共有されるべき客観的な視点からの記録・情報でもある。

3 荒井退造生誕120年記念「島守」シンポジウムの開催(令和2年)

(1) 新たな広がりを見せる荒井退造の顕彰活動

戦後70年を契機に栃木県で本格的な退造の顕彰活動が始まって約5年が経過した令和2年の9月19日、荒井退造の生誕120年にあたるこの年、退造を顕彰する大規模なシンポジウム⁶が、当時製作中の映画「島守の塔」の製作委員会(委員長 嘉数昇明)の主催、栃木県、栃木県教育委員会、宇都宮市、宇都宮市教育委員会の後援で開催された。会場は栃木県総合文化センター(大ホール)で、

⁵ 2015年6月23日「下野新聞 論説」、2019年7月13日～8月18日「栃木県立博物館 2019年度人文系テーマ展 戦時下沖繩の警察部長 荒井退造 一辞令からたどる足跡展 リーフレット」など。

⁶ 戦後75周年企画「島守の塔」平和発信事業として栃木県よりローカルプロジェクトモデル事業として助成を受けている。

コロナ禍の感染防止策がとられる中、約400名が参加した他、事前登録によるWeb配信も同時に行われ、会場である栃木県から離れた兵庫県や沖縄県の関係者も聴講・参加した。これまでにない大規模な退造の顕彰活動事業であり、退造に興味・関心を持つ市民が増えて行くと期待される。

シンポジウムの全プログラムを具体的に示せば、右図のとおりである。(敬称は省略。)

このシンポジウムは、本県(本市)出身者である荒井退造の生誕120年の記念であると同時に、退造の活躍の舞台でありまた最期の地でもある沖縄県、そして島田叡知事の出身地である兵庫県という、3県の関係者の絆を強めようという交流促進という目的も持って企画されていた。それを象徴するものが「トライアングルシンポジウム」と銘打って栃木、沖縄、兵庫3県からパネリストを招いて行ったパネルディスカッションであった。



写真 「島守」シンポジウムの様子
下野新聞社より提供

【シンポジウムのプログラム】

- 1) 沖縄の伝統芸能エイサー(演舞)
栃木エイサーシンカ琉和
- 2) 主催者挨拶
映画「島守の塔」
製作委員会委員長 嘉数昇明
- 3) 来賓挨拶
栃木県知事 福田富一
沖縄県野球連盟会長/映画「島守の塔」製作
を応援する会
沖縄共同代表 又吉民人
- 4) 「3分で知る沖縄戦」上映
(琉球新報社作成動画)
- 5) 「荒井退造の生涯をたどる」
解説 栃木県立博物館研究員 小柳真弓
- 6) 基調講演
「映画監督として生きて—映画『島守の塔』
完成に向かって」
講師 映画「島守の塔」監督 五十嵐匠
- 7) トライアングルシンポジウム
パネリスト
元宇都宮高等学校長 齋藤宏夫
元沖縄県副知事 嘉数昇明
神戸新聞社執行役員経営企画局長 小野秀明
コーディネーター
作新学院大学女子短期大学部教授 西田直樹
- 8) 「平和の詩」(朗読)
宇都宮高等学校演劇部のみなさん
- 9) 閉会挨拶
映画「島守の塔」製作委員会副委員長/下野
新聞社代表取締役社長 岸本卓也

図 シンポジウムのプログラム

(2) 3県の交流を促進するトライアングルシンポジウムの成果

1) 「歴史」と「情報」の共有の推進

パネルディスカッションでコーディネーターを務めた私は、その冒頭で「人が仲間意識や絆を深めるとき、そこには歴史と情報の共有が深くかか

わっている。我々栃木県民が荒井退造の顕彰を通し、沖縄戦の歴史や島守たちの顕彰活動の情報を共有することで、栃木県のみならず3県の人々の絆を深め、沖縄戦や平和の尊さについて共に考え、共に歩いていける土壌を作っていく。」という、パネルディスカッションの到達目標を示した。

パネルディスカッションに先立つ、琉球新報社作成の動画「3分で知る沖縄戦」の上映と、栃木県立博物館主任研究員の小柳真弓氏⁷による「荒井退造の生涯をたどる」の解説のプログラムの中で、参加者はこのパネルディスカッションの基盤となる歴史的な知識を共有した。その上で以下のような顕彰活動の情報（あゆみ）が各県のパネリスト（及びコーディネーター）から提示された。

【沖縄県：嘉数昇明氏より】

十・十空襲以降県政の最高責任者である知事が不在で県民に不安が広がる中、荒井退造は警察部長という立場ではあったが、事実上の知事代理として住民避難や食料確保の陣頭指揮を執った。彼は当時の部下からも人間的に慕われていて「この人となら一緒に死ぬる。」「死んでも悔いはない。」と言った言葉が伝え残されている。

沖縄戦最後の激戦地であった摩文仁の丘（糸満市）に建つ「島守の塔」は、銘が刻まれている沖縄県知事島田叡と沖縄県警察部長荒井退造を含む469名が祭られている。「島守の塔」（初代）が建てられたのは昭和26年、アメリカの統治下でのことである。建立にあたっては沖縄全県から寄付を集めた。同時に、この慰霊塔の名称も公募され「島守（の塔）」⁸となった

【兵庫県：小野秀明氏より】

島田叡の母校である兵庫県立兵庫高校（旧制第

三神戸中学校）では昭和39年に島田叡の顕彰碑が島田叡氏事跡顕彰会により建立されている。この時の記念事業として追悼録「沖縄の島守『島田叡 親しきものの追憶から』」が版行されている。また、野球部員スポーツマンであった島田叡を偲んで、同校の運動部や文化部で県大会優勝以上の生徒に贈られる島田杯も創設された。この島田杯は、同年沖縄県高野連にも贈られた。現在も沖縄県高等学校野球新人中央大会の優勝校には島田叡知事の名を冠した「島田杯」が授与されている。

昭和47年の沖縄返還後は、兵庫県と沖縄県の交流も更に盛んになり、同年には沖縄県・兵庫県友愛提携が調印され、相互交流が始まった。兵庫県による沖縄・兵庫友愛スポーツセンターの寄贈をはじめ、青少年交流事業など多くの交流事業が行われている。

尼崎市（兵庫県）の高校による甲子園（高校野球）での沖縄県出場校の応援も、1980年代位から続く交流事業の一つである。

【栃木県1：斉藤宏夫氏より】

戦後70年を契機に、斉藤氏自身は、塚田保美氏やNPO法人「菜の花街道」の活動を知り、自らも教育分野での荒井退造顕彰活動をスタートさせて行った。

平成27年から沖縄との交流が始まり、当時校長を務めていた宇都宮高校の生徒に「島守の塔」について話すとともに、県立高校の中で沖縄に修学旅行へ行っている高校の校長あてに「沖縄へ行ったら栃木の塔だけでなく、隣に島守の塔があり、そこに（本県出身の）荒井退造という人が祭られているから、ぜひ行ってほしい。」と言った内容のメールを送った。

また沖縄県高等学校野球新人中央大会の優勝校に授与される「島田杯」の先例に倣って同大会の準優勝杯として「荒井杯」を創設することを宇都宮高校同窓会に提案。平成28年3月26日に、沖縄セルラースタジアム那覇において宇都宮高校同

7 同氏は、栃木県立真岡工業高等学校在職中の平成27年9月25日に沖縄へ修学旅行に行く予定の生産機械科の生徒に対して沖縄戦や荒井退造について学ぶ授業を実施している、また平成29年に栃木県教育委員会が初めて県立高校向けの資料集に荒井退造を取り上げた際、その編集に携わっている。

8 『沖縄の島守』田村洋三著「第十六章二人の島守 島守塔」（文庫版p.479）にも関連記述あり。

窓会から沖縄県高校野球連盟への「荒井杯」贈呈を実現させた。同日、式典に参加した宇都宮高校野球部部員は、首里高校及び小緑高校と親善試合をおこなった。宇都宮高校野球部では、尊敬され、またスポーツ万能であった退造の遺徳を偲び、平成27年から清原地区（宇都宮市）にある荒井退造の生家訪問と墓参を毎年続けている。

【栃木県2：西田直樹より】

パネルディスカッションで、コーディネーターを務めた私（西田）からも、自身の顕彰活動の事例報告を行った。以下の通り書き添える。

平成27年に作新学院大学の共通教育科目である「とちぎ学」の授業の宇都宮市の歴史の中で、宇都宮市清原地区出身の荒井退造を取り上げている。退造の生涯を通して、（当時の徴兵年齢でもある）大学生の視点からもう一度平和の大切さや命の尊さについて学び考えることに加え、（間もなく社会人として仕事を持って働き始める学生たちに対して）職務への責任感や仕事観を学び考える機会としている。そこには、授業を通して「称賛される仕事よりも感謝される仕事を大切に考えてやり遂げる人間を育てる。」という目標がある。

2) パネルディスカッションのむすびに

3県からのパネリストによるパネルディスカッションを、コーディネーターの私は以下のような言葉で結んだ。「激しく残酷な沖縄戦の中で知事として、警察部長としてその職責を全うした島田叡と荒井退造、そしてその部下の方々や沖縄県民の生きざま、ふるまいから私たちは現代の社会生活に生かしていくべきことを学ばなければいけないと思います。（中略）私たち栃木県民は荒井退造の顕彰を通し、あの凄惨な沖縄戦を語り継ぎ、また荒井も望んだであろう沖縄の平和について、沖縄県や兵庫県の人々と共に考え実現していかなければならないと思います。」この結びの発言については、今後の荒井退造顕彰活動のひとつ

の方向性を示したものと自負する次第である。

4 おわりに

令和2年3月、島田叡と荒井退造の二人を主人公とする映画「島守の塔」（五十嵐匠監督作品）の撮影が沖縄でスタートした。しかしコロナ禍の中で撮影を中断せざるを得なく、予定されている宇都宮市内での撮影も未だ行われていない状況である。撮影の再開と映画の完成及び全国での公開が待たれる。

「島守」シンポジウムの基調講演の中で、五十嵐監督は「映画というものは100年、200年後も観ることができる（中略）永遠に残る作品にしたいと思っています。」と述べた。確かに映画のデータ（昔でいえばフィルム）は、100年、200年残るのだが、その作品の生命をつなぎ、作品のテーマや制作者のメッセージを伝えて生かして行くのは、鑑賞者（市民）である。

今後、映画「島守の塔」が、栃木県をはじめ、宇都宮市における平和教育の教材の一つとして生涯学習も含めて幅広く活用されて行くことを期待したい。

本稿の執筆にあたり、栃木県立博物館の小柳真弓氏、下野新聞社の綱川仁士氏にご資料提供等のご協力をいただいた。あらためて感謝申し上げます。

主要参考文献

- 荒井紀雄，1992，『戦さ世の県庁 記録集成』中央公論事業出版
田村洋三，2006，『沖縄の島守』（文庫版）中央公論社
NPO法人菜の花街道 荒井退造顕彰事業委員会編，2015，『たじろがず沖縄に殉じた荒井退造』下野新聞社
栃木県立博物館，2019，『栃木県立博物館研究紀要36号』同博物館